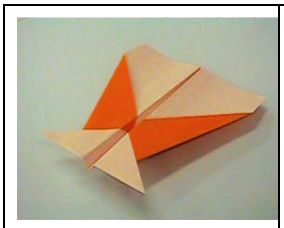

イカが空を飛んだ

大川原化工機　横山哲夫

E-72

発行日
2014.12.18

イカが空を飛んだ。ジャンプではなく、推進力を得て加速し、編隊飛行をとって飛んだのである。イカが空を飛ぶことは、知る人ぞ知る、事実であった。北海道大学の学生が、初めて、その瞬間の撮影に成功する。僅か３秒、３０mの飛行だが、足だか手だか区別が付かない足を器用に広げて、飛んだ。写真を見ただけなのだが、素晴らしい編隊飛行である。この研究は、「外洋イカは本当に飛ぶ」というタイトルの論文で、ドイツの科学雑誌「Marine Biology」に公表された。

イカに興味を持ったのは、３年前ごろだろうか。神田の書店で、「イカの心を探る」と言う題名の本に出会った。えっ、イカに「心」があるのかと思い購入し、一気に読んだ。イカは、人間が地球に登場するおよそ２億年以上前に、恐竜が暴れまわっていたころ、アンモナイトの親戚のベレムナイトから進化して、イカになった。それから２億年、イカは生き抜いて来た。魚に比べ、何となく頼りなく見えるのだが、大王イカのように、グジラにへばりついて吸盤の後を残す奴もいる。

イカの先祖のベレムナイトは、身体をカラで覆っていた。しかし、ある時、イカはそのカラを脱ぎ捨てる。ただでさえ、危険な海のなか、自分を守ってくれるカラを脱ぎ捨てた。昔、「私は貝になりたい」と言う映画があったが、貝に嫌気がさして、イカになった貝がイカである。イカは、きっと、そう思ったに違いない。

イカを漢字で書くと「烏賊」となるが、漢字を見ただけでは、イカを想像できない。死んだふりをして、海面を漂い、近づいて来た鳥を襲うことがあるので、「烏賊」となったそうだ。また、イカは抱き合って愛情表現をするそうで、人間にも似た行動をとる。しかし、それだけではない。フランスの海洋学者のジャッククストーは、イカのことを海の霊長類と言ったそうである。この本を読んで、まさしく、その通りだとおもった。

まずは、イカの脳である。脳の大きさによって、頭の善し悪しは一概には言えないが、体重あたりの脳の重さを比較すると、イカは、爬虫類や魚類にまさり、哺乳類や鳥類に迫る。そして、その脳に情報を送る目は、人間と同様、レンズ目である。この

レンズ目の大きさは、人間の体の大きさに比較すると、バスケット･ボールほどになると言う。更に、イカは視力も良い。そして、この優れた目は、大きな脳の真横についている。大きなレンズ目で集めた情報を、素早く脳に伝達するのに、好都合である。イカは、この二つを武器に、大海に出て行く。

鏡に映る自分が、自分である事を認識する能力を、「鏡像自己認識」と言う。地球上には１００万種類以上の動物がいると言われるが、この能力を持つ動物は、今のところ、わずか８種類にすぎない。当然、人間はこの能力を持っているのだが、我々になじみが深い犬に、この能力はない。また、人間に近い霊長類は、全てこの能力を持っているように思えるのだが、ゴリラにその能力は無い。鏡像自己認識の能力を持っている動物は、人、チンパンジー、オラウータン、像、イルカ、クジラ、鳥のなかま、そして、どうも、イカがその能力を持っているようなのである。犬などであれは、鏡に映った自分を敵と思い、威嚇するのだが、イカは鏡に映る自分の姿を見て、いかにも愛おしいように、鏡にすり寄るのである。

イカは、生まれると、周囲の状況から様々なことを学習する。生まれて間もないイカに、忙しく泳ぎまわるミジンコを餌に与えた場合と、動きのにぶい餌を与えた場合とでは、後者のイカは、大人になって、素早い動きをするミジンコが捕食出来ず、死んでしまう。本能と言うよりも、幼いときの経験が、イカにとっても、重要なようだ。イカの仲間であるタコは、仲間の狩猟を見て真似る。また、瓶のふたを開け、なかのえさ食べてしまう。イカも同様の観察力や、行動力を持っている。

イカの群れのなかで、リーダーになれる個体は、どのような個体であろうか。たとえば、猿山の猿であれば、大きくて力のある猿が、ボス猿になる。ライオンやオットセイなども、同様である。しかし、イカは違う。イカのリーダーは、大きく、力の強い個体ではなく、付き合いのいい奴がリーダーになる。群れの仲間たちとコミィニュケーションを取り、且つ、他のリーダーともコミィニュケーションを取って情報を共有する。そのような個体が、リーダーになる。ある個体が危険を察知すると、その情報は、その群れのリーダーに伝わる。そのリーダーは、その情報を別のリーダーに伝える。イカが空を飛んだのも、このような状況のなか、皆で、危険回避行動を取った結果である。

この本を読み終えて、すごくイカが好きになった、と同時に、２億年間生き続けたイカの知恵は、地球上に生きる同じ生物である人間に、何か示唆を与えているような気がする。カラを捨て、大海を目指す、幼いときの経験の重要性、仲間との協調性など、人間社会にとっても重要な知性である。著者の撮った一枚の写真がある。たれ目で、優しくこちらを見ているイカ、いかにも何かを話かけてきそうだ。

もしも、地球に陸地がなかったら、爬虫類や哺乳類は、この世に生まれなかったかも知れない。当然、人間の文明も生まれず、この地球は、「猿の惑星」ならぬ、きっと平和な「イカの惑星」になっていたかも知れない。スーパーの魚売り場で、並べてあるイカの目をみる。何かあわれに感じる。愛すべき、イカ。家で飼えたら、犬のように友達になれたかも知れない。しかし、イカの寿命は一年と短すぎる。

参考資料：　「イカの心を探る」　琉球大学教授　池田　譲　著
Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ　イカ
Daily motion 世界初！「飛ぶイカ」解明
池田　譲　教授　ホームページ